

論文

もう一人の実存の思想家 ——ハンス・リップス

的 場 哲 朗

解釈学 (Hermeneutik) が一つの哲学運動として台頭して以来、フランクフルトの哲学者ハンス・リップス (Hans Lipps) を解釈学の先駆者の一人として再発見・再評価しようとする声が高まっている。その代表者はガダマーやボルノーである。⁽¹⁾そして、彼らのこの声に応えるかのように、1976年から翌年にかけて、リップスの著作集が公刊⁽²⁾これにより、彼の哲学の全容も——その特異な人柄⁽³⁾とならんで——次第に明らかになりつつある。

と同時に、哲学者としてのリップスの評価も高まりつつある。ボルノーは、リップスを「ドイツ哲学における最も独創的な人物の一人⁽⁴⁾」と評価、リップスの思想の本格的な紹介を公刊している。彼はもともと、友人としてリップスの晩年を最もよく知る一人であり、またリップスの死後、彼の代講を務めたこともあるのである。それだけにその本は、「出るべくして出た本」であった。ボルノーのこの紹介の姿勢は、1955年——リップスの死後15年目にして初めて出た——のガイスナーの、「今日に至るまで、この……フランクフルト・アム・マイン大学の哲学正教授の哲学的労作全体についての叙述がない⁽⁵⁾」という、「叫び」にも似た主張に通じており、ガイスナーはその『人間と言葉』の序論ではっきりと、リップスは「ドイツの“第三の力 (die dritte Kraft)”である⁽⁶⁾」と位置づけている。もちろん、第一、第二の力とは、ハイデガーとヤスパーズということになる。——ともあれ、ボルノーもガイスナーも、共に哲学者リップスが見落され、忘れられてきた、という一言をそこに

付け加えることを忘れなかった。

では、ハンス・リップスの哲学とはどのようなものなのだろうか。

彼の哲学については一般にあまり知られていないし、論文なども皆無の状態である。おそらく、哲学史の知識として『解釈学的論理学研究』(Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik, 1938) や『認識の現象学研究』(Untersuchungen zur Phänomenologie der Erkenntnis, 1927/28) が知られているかもしれない。あるいは、ゲッチングンの現象学サークルの一人として、フッサール主催の雑誌『哲学と現象学的研究のための年報』(Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung) の片隅の、集合や判断に関する二つの、しかも両論文合わせても23頁足らずの小論文が思い出されるかもしれない。⁽⁷⁾ もちろん、解釈学の先駆者の一人と考えることもできる。ガダマーは『真理と方法』で二度リップスに言及しており、ボルノーは、ゲオルク・ミッシュと並べて、リップスをデイルタイの継承者であるとしているのである。⁽⁸⁾ ハンス・リップスは、要するに、現象学者であるとともに解釈学者であり、独創的な哲学者の一人と目されながらも、しかし見落され、忘れ去られてきた哲学者であったのである。

しかしながら、リップスの思想の中心はいったいどこにあったのだろうか。以下の論稿は、以上のようなリップス評価を踏まえたうえで、改めてリップスの中心思想を“現実そのものからの思想”，もっと端的に言えば，“実存の思想”である，と再評価の試みを行なうものである。その試みの手順は次のようになる――。

1. リップスの経歴を簡単に辿りながら、講壇の哲学者とは異質なリップスの姿を描き出し、同時に彼の“ハイデガー体験”に触れる。
2. 次に、当時の時代思潮であった「実存哲学」をリップスがどのように見たかを明らかにし、彼の“基本的な姿勢”を際立たせる。
3. リップスの『解釈学的論理学研究』という著作の根底に、“実存の思想”が深く流れており、この著作は端的に言って“実存の解釈学”であ

る，ということを示す。

4. 結論として，リップスの思想を更に高い地点から俯瞰し，彼の「実存の思想」を，「自然科学からの実存の思想」である，と位置づける提案を試みる。

1. 行動の人リップスと、ハイデガーの実存論的分析論

ハンス・リップスは，1889年9月23日にドレスデンに近いピルナに生れている。1922年からゲッティンゲン大学で，次いで1935年からはフランクフルト大学でそれぞれ哲学を講じたが，しかし，1941年9月10日，折からの大戦に応召，ロシアで戦死している。享年51才。ボルノーによれば，ナチに加担しなかったという理由で，リップスの記念祭は一切大学当局によって拒否された⁽⁹⁾という。

ところで，彼の経歴を振り返ると，彼がいわゆる「講壇の哲学者」でなくむしろ「行動の人」だったということが解ってくる。リップスは，「北のフィレンツェ」と呼ばれた美しい芸術の都ドレスデンの名門ギムナジウム「聖十字」(zum Heiligen Kreuz)を卒業後，ミュンヘン工科大学で「建築学と芸術史」を研究⁽¹⁰⁾これを2学期で終えると，1年の兵役——第1ザクセン王室第100近衛第一歩兵連隊に帰属——の後，ゲッティンゲン大学で「哲学と自然科学」を研究(1911年)，哲学を生物学と結び付け，これにより翌年哲学の学位を得る。同じ年医学部へ転部，翌年(1913年)には医師予備試験に合格，第一次大戦を軍医として応招，復学した1919年には医学の学位を獲得している。終生，リップスは大学の教員として哲学を講じることになるが，しかし教授のかたわら，船医として世界中を旅行し，そのために彼の講義はしばしば中断した⁽¹¹⁾という。ロシアでの彼の戦死も軍医としての活躍中の出来事であり，彼の果敢な行動については，「リップスは，事態が危険になったので，看護兵を呼びもどし，掩護のない中をただ一人，猛火の中から負傷兵を救い出した，これが彼の最後の行為だった⁽¹²⁾」と伝えられている。同じ学生

としてハンス・リップスと親しかったエディット・シュタインはリップスを評して、余暇に哲学しているといったことを書き残しているが、たとえば彼の最後の著作『人間的本性』(Die menschliche Natur, 1941)は塹壕の中で纏め、校訂されたという。ハンス・リップスは「講壇の哲学者」でなく「行動の人」だったと言ってよいであろう。それも、ひじょうに多方面な関心を持ち続けた人だった。彼の著作集を見ると、認識論、自然科学、民族学、論理学、言語学、法律学、軍事論、色彩論、歴史論、数学、倫理学、ゲーテ論など、その他多方面なものが収められている。いや、むしろこれら多方面な論文は、リップス自身の行動そのものから結晶したと言った方が正しいかもしれない。というのも、彼にとって哲学は、思弁的な苦行を要する仕事ではなく、実践的行動そのものの媒介物、その反省だったからである。彼ははっきりと、「哲学は仕事(Beschäftigung)ではなく、……まさにありのままの実践との緊張(natürliche Praxis)にある」(Ⅱ22)、あるいは——体系的哲学者ヘーゲルを批判、むしろ感性的自然的な人間学を自らの立場としたフォイエルバッハを念頭に置きつつ——「哲学はしかし、自分自身から始めようとすることはできない……ただ哲学でないもの(Nicht-Philosophie)からのみ生まれうる」(Ⅱ62)と語っているからである。⁽¹³⁾ ラントグレーベの言葉を借りれば、「今日の時代には珍しくなったが、しかし比較を求めればデカルトやライプニッツのような人の時代には見られたような人だった」⁽¹⁴⁾ ということになるだろう。この点で、大学人として生涯を送ったハイデガーやヤスパーズとは決定的に異なっているといえるであろう。

リップスの哲学は、自己完結した体系や学説ではけっしてなく、むしろ実践的行為そのものの反省であったのである。

そして、この実践的行為そのものを反省する際、その反省に分析の「手段」と「術語」とを与えてくれたのが、他ならぬ実存思想、特にハイデガーの実存論的分析論であった——。

1927年、リップスは最初の著作『認識の現象学研究』の「第一部」を公刊。その序論に、「ここにはフッサールの多くの定式にたいする転回(Wendung)

が含まれている」(IA5) という、師フッサールにたいする「自信に満ちた」一文を書き込んで。ところが、公刊直後、ハイデガーの『存在と時間』が公刊される。これにより、リップスは自分の『認識の現象学研究』「第二部」の大幅な変更を余儀なくされてしまう。と同時に、自分の課題を十分に展開するための「手段」と「術語」とをハイデガーの『存在と時間』から手に入れたことをリップスは自覚することとなった。この事情を彼は『認識の現象学研究』の第二部の巻頭に、言葉少ないとはいえはっきりと、しかも正直に次のように語っている。

「この研究の第一部の脱稿後、ハイデガーの著作『存在と時間』が公刊された。実存論的分析論は、——単に術語 (Terminologie) という点ばかりでなく——多くのものを、私が私の着手点からなし得た以上に鋭く把握する手段 (Mittel) を私に与えてくれた」(IB5) と。⁽¹⁵⁾

では、実存思想のどの点がリップスを引き付けたのであろうか。次にこの問題を明らかにしよう。

2. 「実存哲学」とリップス

リップスの著作集第5巻に、「プラグマティズムと実存哲学」(Pragmatismus und Existenzphilosophie, 1937) という論文が収められている。この論文を手掛りにして、「実存の思想」のどの点がリップスを引き付けたのかを明らかにしよう。

まず、この論文で、リップスは「ドイツにおける現在の哲学状況は実存哲学 (Existenzphilosophie) によって規定されている」と前置きした上で、「実存哲学は従来の哲学との断絶 (Bruch) を意味する」(V 38) と断定する。それはなぜであろうか。

彼によれば、デカルト以降、哲学は「科学と合致」(V 44) し、その範囲内で、学説や体系や立場といった「一つの像」(ein Bild V 16, なお II 60, 81注

を参照のこと)の仕上げに奔走してきた、という。従来の哲学は、結局、体系(System)であって、この体系の中ではあらかじめ「理論的な表象」として「一つの世界像」が決められてしまっており、一切のものは——自然であれ社会であれ、さらに人間であれ——この世界像の中に還元され、「歪曲される」(entstellt werden V11), というわけである。ところが、人間というものは「常に様々な状況の中に立つ存在者」(V45)であり、彼にとって、本来、「現実とは仕上ってしまうことはない(Die Wirklichkeit ist nichts Fertiges)」(II132)のである。このかぎり、人間というものは「生成者であり、常に自己への途上に(unterwegs zu sich)ある」(V49)。つまり、けっして人間は体系化されないのである。ところがしかし、体系哲学は、科学と匿名性を共有して、人間を「超時間的」なもの、普遍的なものに体系化してしまう。体系哲学には、「自己疎外」や「非人間的立場」(V44)が初めから支配しているわけである。「科学的哲学は情緒を知らなかった」(V51)とリップスは言っているが、ここには、ヘーゲル哲学を批判した、あのキルケゴールの姿が重なると言ってよいであろう(V39参照のこと)。

従来の哲学は、体系には夢中になるが、しかし「私の生存の現実、つまり、誕生と死との間に上げられているこの実存(Existenz),を隠蔽」(V46)してしまい、「われわれの有限の実存の不確実性、緊張、未解決性、断片性」、「厳肅性」を「無毒化」(V38)してしまっている、というのである。ここにリップスは実存を見る。いうなれば、実存哲学は、体系哲学によって隠蔽・無毒化されてきた「私の生存の現実」に目を向け、これを取り戻すというのである。実存哲学は、行動家リップスにとって、自分に近い、したがって従来の哲学との「断絶」である、という他ないわけである。

キルケゴールとニーチェにたいする、リップスの次の言葉が彼のこの「実存哲学」観をよく示している。すなわち、——

「キルケゴールは個々の人間を覚醒させ、理性や『客観的精神』
のような普遍的なものへと〔自己を〕喪失した状態から、有限的で、

また責任を負わざるをえない個々の現実のうちへと私を呼び戻そうと望む。ニーチェが覚醒しようと望むのも、実存のレアリスムスである。〔二人にとっては〕主要な像や何らかの世界観が問題なのではなくて、むしろ、私を現実には突き動かしているが、しかし多くの場合隠蔽されている当のもの、つまり、われわれの意識的な生存の基底根拠、これに向かって突破して行くことこそ、問題だったのである」(V46)、と。

体系でなく、生存の現実へと目を向ける実存哲学の動向が「行動の人」リップスの心を引き付けたわけである。だからこそ、「現実との関わり」(V40)という一点で、実存哲学は——いかにもリップスらしいところだが！——プラグマティズムとも並べられる。

「プラグマティズムと実存哲学とは、共に、現実との関わりを取り戻そうと試みている。プラグマティズムは………端的な実践を目指すことで。実存哲学は、思惟の誠実さを求め、個人の厳肅性に訴えることで」(V40)。

さて、もう一つのものをリップスは「実存哲学」に認める。それは、自己覚醒という問題である。この自己覚醒という点で、実存哲学はプラグマティズムよりも一層高く評価されることになる。

プラグマティズムも、たしかに、生存の現実に向かうのである。しかし、リップスによれば、それはあくまで、「認識の際に生じていることを熟考している」(V45)だけにとどまり、したがってプラグマティズムそのものは、このかぎり、現実の生の「付録(Nachtrag)」(V44, 51)にすぎないのである。これにたいし、実存哲学は各自に本来的自己を呼び起こすのである。つまり、「新たな基礎を獲得するための内的な緊張」(V46)を呼び起こし、各自に「危機と変化」(Krisis und Wandlung V50)を求めるというのである。「危機

と変化」とは——リップス流にいえば——現実の様々な状況に自ら対処する最中に突然自らの新たな自己に気付かされると、いうことである。

この“自己覚醒”をリップスは、Man betrifft sich bei sich selbst,あるいは, Existenz betrifft sich bei “Vorgriffen” (V 51) という、いかにもうまいドイツ語で表現している。要するに、自分自身に、あるいは自分の先入見に没入しているところで、突然自分に出会う、自分に気付く、自分に襲われるということを含ませているわけである。逆にいえば、自分自身に没入しないところでは自己覚醒はない、ということにもなる。ボルノーによれば、このドイツ語の用例には、犯罪者が秘密裏に何かをやろうとしたところに、ばったりと人がでくわすといったニュアンスが含まれ、「人が恥しいとしているものにおいてその人がでくわす」⁽¹⁶⁾ といった含みがあるという。リップスの場合、自己覚醒といっても、この現実の生の只中で、その生に巻き込まれている最中に、思わず自己に襲われるわけである。⁽¹⁷⁾

結論的にいえば、リップスが実存哲学に引き付けられたのは、実存哲学が体系でなく現実そのものへ向かったという点であり、現実を単に熟考するのでなく、各自の自己覚醒までも自らの哲学の中に取り込んでいたという点であるといえよう。言葉を変えれば、建築学、生物学、医学（外科医）を志したハンス・リップスにとって、現実の生そのものに即すことはあっても、思弁に墮することのない「実存哲学」は、彼自身の現実そのものを反省する最良の道具となったのだともいえよう。⁽¹⁸⁾ その端的な例は、ハイデガーの実存論的分析論にたいする彼の態度であろう。

リップスはハイデガーと自分自身とを区別しているようには見えないのである。むしろ同一化してしまっているとも見えるのである。「プラグマティズムと実存哲学」という論文の中でも、「ハイデガーは文字通りに読まれることを望んでいる」(V 52) と語った上で、論文全体の丁度半分の頁数を実存論的分析論の解説に当てているのである。もしかすると、ハイデガーもリップスも、お互いに体系哲学ではなく現実そのものの哲学なのだから、区別も、

あるいは同一化も本来必要はない。そのようなものがあつたとすれば、それこそおかしい！と思ってでもいたのかもしれない——。意外とこのようなところにハンス・リップスという‘第三の’哲学者の秘密が隠されているのかもしれない……。

次に、『解釈学的論理学研究』の問題に移ろう。

3. 『解釈学的論理学研究』と‘実存の思想

a.

リップスが実存哲学を評価する理由は、その「現実との関わり」という点であった。リップスのこの‘基本的な姿勢’から見るかぎり、『解釈学的論理学研究』という著作自体、——たしかにデイルタイやミッシュの影響が云々されているが——リップスにとって当然の帰結であつた、といわざるをえないと思われる。というのは、この著作の目標は、伝統的な形式論理学を、つまり、生きた現実との連関を見失いながらも、独立の学科として、自立した一つの体系をなす形式論理学を、改めて現実の生の様々な状況の中に遡らせ、その活性化を図るというものだからである。リップスはこの課題を次のように述べている——。

「判断の形態学に代えて、論理学は話しの類型学 (eine Typik der Rede) を展開しなければならない」(Ⅱ134)。

あるいは、

「判断の形態学を廃止して、それを〔むしろ〕、実存が自らを完遂する歩みの類型学 (eine Typik der Schritte) によって置き換えなければならない」(Ⅱ12)。

初期の「論理学の課題」⁽¹⁹⁾ (Die Aufgaben der Logik, 1927) と題された論文の中では、

「論理学を一つの体系として分析的に (analytisch) 展開する代りに、論理学の配置そのものが反省的に (reflektiv) 把握されるべきである。

……………いわゆる原則として固定できると思われる様々な自明性は、
事実に依然として、生々とした完遂と結び付いているのであり、
この生々とした完遂はただ後から (nachträglich) —— すなわち哲学的
論理学 (die philosophische Logik) において —— のみ……………明確
化されうるのである」(Ⅳ195)。

伝統的論理学は、別に「^{ユンバーコンメン}伝承的論理学」(Ⅱ17, 19, 73), 「学校論理学」
(Ⅱ20, 52, 116, 120, 132), 「形式的論理学」(Ⅱ11, 19, 20, 22, 23, 42,
65, その他)などと表現されている。これに対して、リップス自身は「哲学的
論理学」(Ⅱ42, 53), あるいはカントを意識した上で「超越論的論理学」
(Ⅱ42)を展開するという。

簡単にいえば、こういうことであろう。抽象的な論理現象をただ純粹に形
式的に考察しても、一つの判断に秘められた力、含蓄は出てこない。元来、
判断というものは、裁判官や鑑定家によってそれが下され、不明瞭な状況が
決断されるように、実は常に一定の状況内で生まれ、それだけにまた含蓄や
力もあるわけである。とすれば、判断を、一定の生の具体的完遂の中に、概
念と生との根源的な結び付きの中に遡らせ、把握しなおすべきで、そうして
こそ、論理学は現実のロゴスたる「哲学的論理学」たりうる、ということであ
ろう。

『解釈学的論理学研究』は、このかぎり、形式的論理学の「反駁」を意図
するのではなく、むしろ形式的論理学の「^{ウアシユブルンク}根源を暴き出す」(Ⅱ13), つまり、
「論理学を根源的に我がものとし解釈するための先条件」(Ⅱ19)を提示する、
というべきところであろう。リップスによれば、この研究自体、実は、ロゴ
スをアポパンティコス (ἀποφαντικός, 命題) として把握した、あの「論理
学の父」アリストテレスを、一層根源的なセーマンティコス (σημαντικός,
指示) としてのロゴスの地平に向かって問い質し、この地平を改めて取り戻
す歴史的な試みであるともいう。敢えていえば、キルケゴール、ニーチェ、
ハイデガーなどの実存哲学を踏まえた上で、現実そのもののロゴスを改めて

アリストテレスにまで遡って回復、活性化しようと試みるところに、リップスの『解釈学的論理学』の哲学的位置づけがある、ということになるであろう。この意味では、この研究を「実存的論理学」⁽²⁰⁾と呼ぶボルノーはもっともであるといえよう。あるいは、これはオースチンやサールの「言語行為論」にもつながるといえなくもないと思われる。⁽²¹⁾

ともあれ、リップスが向かう場面は、現実の生、実存の現実以外のものではないわけである。「解釈学」(Hermeneutik)という言葉も、リップスの場合、特別な含蓄があるわけではなく、最初はただ無意識的にすぎなかったものを表明的に際立たせ、意識化し、反省的に我がものとするといった程度の意味しかないのである。いわんや、文献学や精神諸科学との関係はまったくなかった。彼は、この点、首尾一貫して「現実家」、¹「行動の人」であるにとどまり続ける。ボルノーによれば、「解釈学的論理学」という標題でさえ、——リップスが最初に用いたのであるが——印刷の都合で付けられたのであって、彼自身は最後まで気に入らなかった、ということである。⁽²²⁾ 敢えていえば、リップスが向かうコンテクストとは、「状況に応じて結ばれる現実というコンテクスト」(Ⅱ69)であった、ということであろう。このかぎり、端的に「実存の解釈学」である、といってよいであろう。

b.

内容に入ろう——。

リップスは一つの実例をあげている。それは、「チューリップ」という語が、前後のコンテクストから切り離されて耳に飛び込んできた場合の例である(Ⅱ115)。この時、その「チューリップ」という語が、庭の外のチューリップを指すのか、それとも、花一般としてのチューリップを指すのか、その語だけで確定できるか、と彼は問うわけである。むろん、確定できるわけではない。このことからリップスは、「話の進行を通して初めてその話の意味方向は規定される。……語の意義は状況と共に変わり、状況についての先了解をまって始めて、語の意味は正しく受けとられる」(Ⅱ115)と結論する。

話の生々とした姿、我と汝との間に繰り広げられる「間主体的な対話」(Ⅱ28 ff.)の中に話の意味世界は広がる、「語られた語は自分の囲りに、表明化されない一つの領地をめぐるさせている」(Ⅱ71)というわけである。このような「話の超越(Transzendenz der Rede)」をリップスは、「志向性に短絡化されない話の超越」(Ⅱ23)と呼ぶが、それは形式的論理学との関わりではどういうことなのであろうか。

形式的論理学は、一般に、概念、判断、推理という三要素をもつ、とされている。

さて、リップスによれば、推論とは、抽象的認識の空虚な空間中にあるのではなく、むしろ現実の状況の中に、しかも予期しない状況に面して、そこで新たな基礎づけ・打開策が求められるときに、生まれてくるとする。⁽²³⁾ 前提(Prämisse)からでなく、状況や事実の方から推論は生まれてくるのである。それは、したがって、「打開すること(Weiterkommen)」,「自分に状況を開くこと」(Ⅱ10)を意味する、と言う。ここでは、状況がさっと(raffend)つかまれ一気に(zügig)結び合わされ、簡にして要(kurz und bündig)を得ることが大切なのであって、前提といったものは「後からの対象化」(Ⅱ12)の中で作られる、というのである。

判断も、本来、陳述や命題でなく、法延や鑑定の場合に見られるように、未解決の問いが決定されることなのである、とする。つまり、「そこで言葉となるのは状況である」(Ⅱ127)というのである。判断の様態も、各実存が状況の中で自ら打開する様々な在り方であって、多分とか確実というものは、実存遂行そのものである、とする。

このようにして、当然、認識は、リップスの場合、概念への包摂という意味での概念把握でなく、「事物とうまくやっていく(mit etwas zurecht kommen)」,「精通する(bescheid damit wissen)」(Ⅱ56)といったことを意味することになる。論理現象はすべて実存遂行そのものの次元、生の次元に遡らせるのである。

概念も実存遂行に向かってつかまれる。リップスによれば、日常的な生に

おける概念は、「人がそれによって物をつかみ、そこで自らを支える巧みな手際 (gekonnte Griffe)」(Ⅱ 56) である、という。この「巧みな手際」を彼はまた「想念 (Konzeption)」(Ⅱ 56) と名付けるが、その語源 *conceptio* からすれば「概念」とは「孕む・考えをいただく」を意味することになり、それは、状況打開の方向を孕む、あるいはそれを示す先行概念・先了解である、といっているであろう。リップスにとって、概念は、個々の事例を自らのうちに包摂し、これをまた固定的な事態として定義することもできるといったものでなくて、むしろ逆に、状況を打開するための先行的な「取っ掛け・手際」であって、これによって始めて個々の事例が明らかになってくる、というのである。

多少本題から離れるが、リップスはこの想念を大きく二つに分けている。一つは、「実践的な想念」と呼ばれる、状況を打開・進展させるための想念である。これは、今述べたものであるが、もう一つは、言語表現が固有にもつ状況打開能力——たとえば、ピアノとトランプは、本来、別々のものであるが、これらを *spielen* と語れば、そこにドイツ語固有の状況打開性が生まれる——である。リップスはこの打開性を「分類的な想念」(Ⅱ 92) と呼んでいる。言語は固有な状況打開能力をもつ、「どんな言語においても、一つの固有な世界観 (*Weltansicht*) が含まれている」(Ⅱ 81)、という観点から、リップスの独自の言語哲学が展開される。

ともあれ、『解釈学的論理学研究』においてリップスは、一貫してわれわれの実存の現実そのものへと向かい、形式論理学以前の「実存の解釈学」を展開していることは明らかであろう。

4. 自然科学からの実存哲学

ハンス・リップスは実存の現実そのものに向かった。この意味で、彼の哲学的論理学は「実存的論理学」、*「実存の解釈学」*と呼ぶことができた。——では最後に、彼の実存の思想をどのように位置づけることができるだろうか。

リップスのこの試みを、大きな枠で、啓蒙に対するシェトルム・ウント・

ドランク、実証主義に対する後期ロマン主義などといった、歴史の一つの流れに比すことはできるであろう。生の哲学、実存の哲学がそのような歴史的
位置をもつことは事実である。あるいは、彼の哲学的論理学を、ギリシアの
源泉に遡って、論理と言語とを、もっと広く論理^{ロゴス}と倫理^{エトス}とを根源的に結び付
けるものである、ということもできよう。もっと今日的に、リップスを、彼
と同じく若い頃、建築学を学んだヴィトゲンシュタインに比して、一方は第
一次大戦を機に論理的言語に向かったが、他方は、むしろ、事実に言語に向
かった、と位置づけることもできよう。⁽²⁴⁾

しかし、実存思想の内部ではどのような位置を占めるべきなのだろうか。

リップスは神については語らない。そのためか、キルケゴールやニーチェ
への言及は著作集全体でも数ヶ所に留まるのである。状況についてはテーマ
とされるが、しかし「限界状況」(ヤスパース)、「死に臨む存在」(ハイデガ
ー)はテーマとはならない。本来的自己はテーマとなるが、しかし「自己へ
の途上である」とは言っても、自己そのものを析出できるとは、リップスは
考えていない。リップスは、先に述べたように、敢くまで現実との関わりの中
で自己をテーマとしようとする。このかぎり、リップスの実存思想は現実
そのものの記述学である、と言ってよいかもしれない。ハイデガーへの彼の
傾倒も、この実存の現実という一点にあったのである。

ところで、ハンス・リップスは、実例——「進行性マヒ」(Ⅱ54)、「流行
性感昌」,「診断」(Ⅱ55)、「蝶の羽」(Ⅱ58)、「家うさぎ」,「チューリップ」
(Ⅱ90)、「顕微鏡」(Ⅱ105)、「小児病」(Ⅱ107)、「カッコウ」(Ⅱ109),
「ヒヤシンス」(Ⅱ126)、「結核症」(Ⅱ133)など——をどちらかというとな
自然科学畑の方から選んでくる。実例とは、元々、説明の方便である、と一般
に考えてしまうが、しかし、リップスの場合は、むしろ「実例」は哲学にお
いて最も重要な位置を占めているのである。彼は、「本当に哲学的な問題は
実例において提示されうるのみである」(Ⅱ21)、と述べているのである。先
き程述べた、「巧みな手際」としての「想念」も、その説明は医師としての
彼の経験、生物学者としての彼の観察経験から行なわれるのである。リップ

スは「行動の人」であると先に言ったが、むしろ「眼の人」、「手の人」、もっと端的に「自然科学の人」であると言った方がよいであろう。⁽²⁵⁾ リップスの実存の思想はまさに、自然科学からの実存思想であると位置づけられるのではなかろうか。

事実、彼は教授資格論文として「生物学の哲学」(1921年)を講じており、以来、しばしば自然科学をテーマとして選んでいる。ボルノーの証言によれば、「リップスは、生物学出身のため、精神諸科学にはまったく関係をもたなかった⁽²⁶⁾」と言う。また、ニュートン力学的自然科学に対するゲーテの自然論というテーマはリップスの最も得意とする、そしてしばしば講演したテーマであったのである。⁽²⁷⁾ ヤスパースは精神病理学の方から、そしてハイデガーはアリストテレス研究の方から、それぞれ実存思想に向かった、とはよく言われるが、この意味で言えば、ハンス・リップスは自然科学(医学と生物学)の方から実存思想に向かったのであり、そしてまた、この点にこそ「第三の力」としてのリップスの意義がある、と言えるのではないだろうか。

注 釈

- (1) Hans-Georg Gadamer, "Wahrheit und Methode" 1960. Otto Friedrich Bollnow, "Studien zur Hermeneutik" Bd. II : Zur hermeneutischen Logik von Georg Misch und Hans Lipps. 1983を参照のこと。その他, Gadamer の "Philosophische Lehrjahre" S.161-5, Bollnow の "O.F. Bollnow im Gespräch" S. 62-72には興味あるリップス像が描かれている。
- (2) Hans Lipps Werke I-V, Vittorio Klostermann, 1976-77.
 1. Bd. Untersuchungen zur Pänomenologie der Erkenntnis.
 1. Teil. Das Ding und seine Eigenschaften (I.A として引用)
 2. Teil. Aussage und Urteil (I.B として引用)
 2. Bd. Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik (II として引用)
 3. Bd. Die menschliche Natur
 4. Bd. Die Verbindlichkeit der Sprache. Arbeiten zur Sprachphilosophie. (IV として引用)
 5. Bd. Die Wirklichkeit der Menschen (V として引用)
- (3) 拙著「私の現象学の旅——Hans Lipps を訪ねて」(Brunnen, Nr.275. 10-11頁,

- 1985) 参照のこと。なお, Hans-Georg Gadamer, Philosophische Lehrjahre S. 161-165を参照のこと。
- (4) Hans Lipps Werke II のカバー
 - (5) Karl Hellmut Geißner, Der Mensch und die Sprache 1955. S. 1.
 - (6) Karl Hellmut Geißner, 上掲書
 - (7) Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd6, 1923.
S. 561-571. および Festschrift Husserl. Ergänzungsband zum Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung. 1929 .S. 283-296.
 - (8) Hans-Georg Gadamer, Wahrhat und Methode, 4. Auflage, 1975. S.405, 434 ff. Otto Friedrich Bollnow, Studien zur Hermeneutik, Bd II : Zur hermeneutischen Logik von Georg Misch und Hans Lipps, 1983.
 - (9) O.F. Bollnow, Studien zur Hermeneutik, Bd II, S. 194. なお, フランクフルト大学の「講義便覧 (Vorlesungsverzeichnis)」(1942年)の冒頭に, ナチの紋章を掲げた大学教員戦死者名簿を見たときの驚きは忘れられない。ハンス・リップスは, 「ドイツの将来のための戦いにて名誉の戦死をとぐ」という表題の下, 第一番目に記されている。
 - (10) 19世紀のドレスデン, ミュンヘンの芸術については, 宮下健三, 『ミュンヘンの世紀末——現代芸術運動の源流』(中公新書)を参照のこと。宮下氏は, 雑誌『バーン』の趣意書をもとに, 「……当時の芸術と文学運動の中心地は, 第一位ベルリン, 第二位ドレスデン, 第三位ミュンヘン, 第四位ハンブルク」(104頁)であったと述べている。1895年の趣意書なので多少時代は遡るが, しかし若きリップスがどれほど芸術に囲まれていたかが窺われる。
 - (11) Ludwig Landgrebe, Das Problem der ursprünglichen Erfahrung im Werke von Hans Lipps (in : Philosophische Rundschau, 4, 1956/57) S. 166.
 - (12) 拙著, 「私の現象学の旅—— Hans Lipps を訪ねて」, 10頁参照のこと。
 - (13) 後で触れることであるが, 近代科学に代表されるような, 世界を一つの像 (ein Bild) としてつかまえる体系的哲学に対して, 「物との生々とした出会い」(der lebendige Umgang mit den Dingen) (V.S. 152) を力説し, ここから哲学を出発 出発させようとするリップスにとって, 体系的で論理主義的なヘーゲルの観念哲学に対して, 感性の哲学を対置し, そこに「将来の哲学の根本命題」を見たフォイエルバッハは, 重要な意味をもった, と思われる。なお, フォイエルバッハ自身の言葉については, 「哲学改革のための暫定的命題」(Vorläufige Thesen zur Réformation der Philosophie, [in: Philosophische Kritiken und Grundsätze] S. 180f.) を参照のこと。
 - (14) Landgrebe, 上掲書, S. 166.
 - (15) 著作集V. には, リップスが行った『存在と時間』についてのゼミナール——彼は二度ゼミナールで『存在と時間』を用いている〔1931年夏学期にゲッチン

ゲンで、さらに1937年夏学期にフランクフルト・マム・マインで]——の覚え書きが収められており、ハイデガー哲学理解のための主旨として次の言葉がある。
「自分自身の方から解明するのではない。自分をその中に移し入れるのだ。うわべだけの理解を避けるのだ」(S. 195)。

- (16) O.F. Bollnow, 上掲書, S. 275.
- (17) リップスによれば、ソクラテスの *τέχνη μαιευτική* もプラトンの *θανάσιον* も、この bei sich selbst sich betreffen に他ならない、哲学するとはすべて、この意味での自己覚醒であると語っている (Ⅱ, S. 21~22の注を参照のこと)。「哲学入門」(Einleitung in die Philosophie) と題された講義ノートの断片の中でも、「哲学の問題はいきなりは理解されない。哲学には移し入れられる他はないのである」(V. S. 161) とある。
- (18) 「ひとりの人間の精神性(Geistigkeit)はその人の手に示される」(Ⅱ78)。
- (19) 『解釈学的論理学研究』(1938)の課題を明確に述べた論文として注目すべきであろう。当時(1927年)、リップスは、「解釈学的論理学」を「哲学的論理学」と呼んでいたことが、この論文から分かる。なお、『解釈学的論理学研究』の中でも二度用いられている (Ⅱ42, 53)。
- (20) O.F. Bollnow, 上掲書, S. 282.
- (21) J.L. Austin, *How to Do Things with Words*, 1962., *Sense and Sensibilia*, 1962. J.R. Searle, *Speech Acts An Essay in the Philosophy of Language*, 1969. *Intentionality An Essay in the Philosophy of Mind*, 1983.
- (22) O.F. Bollnow, O.F. Bollnow im Gespräch, S.68.
- (23) 「すべての推論は自らの決断であり、自らを自らの様々な可能性へと投企することである」(Ⅱ10)。
- (24) Gottfried Brauer, *Wege in die Sprache Ludwig Wittgenstein und Hans Lipps* (in: *Bildung und Erziehung*, XVI. Jahrgang 1963. (12 Hefte) S.131-140.
- (25) 注(18)を参照のこと。
- (26) O.F. Bollnow, 上掲書, S.68.
- (27) *Die Subordination der Organe* (1921), *Zur Morphologie der Naturwissenschaften* (1932), *Goethes Farbenlehre* (1939) (in:V)

なお、O.F. ボルノー、芦津丈夫訳「H. リップスのゲーテ自然科学考」(『モルフォロギア』第4号, 1982, 50-59頁) F. キュンメル、高橋義人訳「ゲーテ自然科学の受容——G. ミッシュ、J. ケーニヒ、H. リップスの場合」(『モルフォロギア』第4号, 1982, 60-77頁)を参照のこと。

更に、Eberhard Scheffele による “‘Sehen’ ist eine Interpretation der Dinge — Goethes Naturwissnschaft in der Sicht von Hans Lipps —” が『モルフォロギア』第8号に掲載予定である。